

神奈川 芸術プレス

vol.162

KANAGAWA ARTS PRESS

2023年(令和5年) 3月20日発行



特集

“争い”の時代と表現

WORKS 『ライカムで待っとく』対談：兼島拓也×横田和弘 「ドリーム／ランド」インタビュー：青山 悟

『スティーヴン・イッサーリス チェロ・リサイタル』インタビュー：スティーヴン・イッサーリス

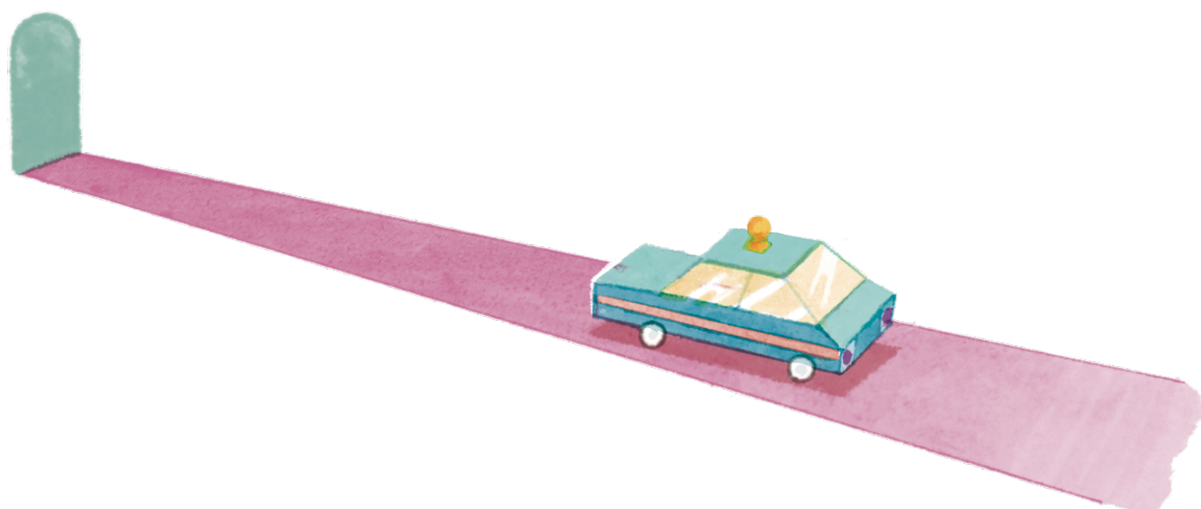
SIGHT 猿島(横須賀市)、よこはま動物園ズーラシア(横浜市) **インタビュー** 今日マチ子、波戸康広 **コラム** 平野正裕

追悼 沼野雄司「一柳慧というフモール」

ほか アートシーンプレイバック、C×(シー・バイ)シリーズ、公演の舞台裏



公益財団法人
神奈川芸術文化財団



04 追悼

「一柳慧というフモール」

沼野雄司(神奈川県民ホール・神奈川県立音楽堂 芸術参与/音楽学者)

05 特集 “争い”の時代と表現

06 WORKS

1. 『ライカムで待っとく』 対談：兼島拓也(チョコ泥棒主宰/劇作家)×横田和弘(劇団河童座主宰/演出・劇作家)
2. 「ドリーム／ランド」インタビュー：青山 悟(アーティスト)
3. 『スティーヴン・イッサーリス チェロ・リサイタル』 インタビュー：スティーヴン・イッサーリス(チェリスト)

12 SIGHT

1. 猿島(神奈川県・横須賀市)
2. よこはま動物園ズーラシア(神奈川県・横浜市)

14 インタビュー

今日マチ子(漫画家)
波戸康広(横浜F・マリノス アンバサダー)

16 コラム

大曾根家の母・秋津荘の娘 平野正裕

17 連載

REGULAR FEATURE

18 アートシーンプレイバック

2022年下半年の音楽プログラムをふりかえる

文：八木宏之(音楽評論)

2022年下半年の演劇プログラムをふりかえる

文：鈴木理映子(編集者・演劇ライター)

22 C×(シー・バイ)シリーズ

C×C 作曲家が作曲家を訪ねる旅

——作曲家・山根明季子がジョン・ケージを訪ねて

23 公演の舞台裏

空間デザイナー編 建築家・空間デザイナー 木津潤平

24 神奈川芸術プレス | 読者アンケート

ご支援のお願い

(公財)神奈川芸術文化財団 賛助会員・協賛・協力・寄付 ご芳名

(公財)神奈川芸術文化財団について

1993年10月に設立された神奈川芸術文化財団は、以下3つの県立文化施設の運営と、芸術文化の創造・普及に一体的に取り組んでいます。

神奈川県民ホール


神奈川県民ホール(以下、県民ホール)

1975年、全国屈指の大型文化施設として開館。大型の舞台機構を備える大ホール、オルガンが設置された小ホール、ギャラリー、会議室等を有する多目的ホールです。オペラ、バレエ、コンサートから各種大会・式典、美術作品の展示まで、多彩な催しが行われています。

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町3-1
TEL : 045-662-5901 (9:00~17:00)
<https://www.kanagawa-kenminhall.com/>

2023年度ラインアップはこちら

https://www.kanagawa-kenminhall.com/news_detail/2146

KAAT 神奈川芸術劇場


KAAT 神奈川芸術劇場(以下、KAAT)

2011年、モノをつくる(芸術の創造)、人をつくる(人材の育成)、まちをつくる(賑わいの創出)の「3つのつくる」をテーマとする創造型劇場として開館。最大約1,200席のホールのほかに、大スタジオ(約220席)と、3つのスタジオを有します。

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町281
TEL : 045-633-6500(10:00~18:00)
<https://www.kaat.jp/>

2023年度ラインアップはこちら

https://www.kaat.jp/news_detail/2127

木のホール

神奈川県立音楽堂


写真：青柳聡

神奈川県立音楽堂(以下、音楽堂)

1954年、公立施設としては日本で初めての本格的な音楽専用ホールとして開館。前川國男設計による戦後モダニズム建築の傑作として評価されています。ホールの壁面はすべて木でつくられ、その美しい響きで愛されています。2021年に神奈川県重要文化財に指定。

〒220-0044 神奈川県横浜西区紅葉ヶ丘9-2
TEL : 045-263-2567(9:00~17:00 月曜休館)
<https://www.kanagawa-ongakudo.com/>

2023年度ラインアップはこちら

https://www.kanagawa-ongakudo.com/news_detail/2154



1933年

チェロ奏者の父、ピアニストの母のもと神戸に生まれる

1945年 12歳

終戦後、母とともに御茶ノ水や飯倉の将校クラブでディナー・ミュージックを演奏し、プロとして演奏活動が始める

1949年 16歳

ピアニスト原智恵子の下で本格的にピアノを学びはじめる

1952年 19歳

2週間の船旅を経てアメリカに渡る

ニューヨーク滞在中に、ジョン・ケージ、デヴィッド・チューダー、テリー・ライリーら最先端で活躍する音楽家をはじめ、舞踊家のマース・カニングハム、現代美術家のロバート・ラウシェンバーグ、ジャスパー・ジョーンズらと親しく交流する

1961年 28歳

帰国

武満徹、小杉武久、黛敏郎、石井眞木、高橋悠治、高橋アキ、磯崎新、横尾忠則ら多数の芸術家と交流

1976年 43歳

ドイツ学術交流会 (DAAD) の招きでベルリンに滞在。欧州各地の音楽祭で自作の発表と邦人作品の演奏を行う邦楽器のための作品や、国立劇場を主な舞台として木戸敏郎、芝祐靖らと協働し、正倉院の復元楽器を使うなどした、雅楽や聲明の作品を数多く発表する。1980年代には、神奈川県直営時代の県民ホールにて、シリーズ「音楽の現在」の企画構成・音楽監督を務める

1996年 63歳

神奈川芸術文化財団 理事に就任

2000年 67歳

神奈川芸術文化財団 芸術総監督に就任。以降、「時代や社会を問う新しい作品を、神奈川から発信し続けること」「自由な発想で、従来の芸術ジャンルの枠組みを越えるような作品の創造に挑戦すること」をテーマに据え、県民ホール・音楽堂の企画立案・事業制作について、総合的な指導・監修を行う

2008年 75歳

文化功労者に選ばれる

2015年 82歳

若手演奏家を支援する「一柳コンテンポラリー賞」創設

2017年 83歳

恩賜賞・日本芸術院賞を受賞

2018年 85歳

文化勲章を受章

2021年 88歳

芸術総監督就任20周年記念「Toshi 伝説」開催

2022年 89歳

10月7日没

1 「読売日本交響楽団第622回定期演奏会」にて世界初演（サントリーホール、2022年10月25日）。



一柳慧作曲《ピアノ協奏曲第4番“JAZZ”》の世界初演となった「クラシックな休日を♪ in 音楽堂～祝祭編」の公演風景（2009年、ピアノ：山下洋輔） 写真：青柳 聡

追悼 一柳慧というフモール

沼野雄司

神奈川県民ホール・神奈川県立音楽堂 芸術参与／音楽学者

そこはかないユーモア。いや、ドイツ語でフモールという方がなんとなくふさわしい。ともかく、それこそが一柳慧という作曲家のきわめて重要な芯の一つだったのではないかと、ずっと考えている。

現代作曲家にして卓球の名手、若い頃からずっと変わらない髪型、オノ・ヨーコと結婚していたという経歴、酒はほとんど飲まずケーキが大好きなこと……。すべてにわたって、本当に育ちの良い人だけが身につけている類の「隙」がある。そこがなんともいえず魅力的だった。

もちろん、音楽も同じだ。最初の12音技法を用いた音楽、その後の偶然性・不確定性の音楽、ミ

ニマルを換骨脱退した70年代の音楽、そしてその後の大規模な交響曲やオペラにいたるまで、様式はまったく異なっているけれども、どんなにシリアスな性格の曲でも、どこかに軽やかさが漂っている。《ピアノ協奏曲第4番“JAZZ”》なんていう、あまりに直截なタイトルも、ほかの作曲家だったら絶対あり得ないだろう。

一柳さんの遺作となってしまうのが《ヴァイオリンと三味線のための二重協奏曲》¹である。最後の1年くらい、一柳さんはこの曲についてよく話してくれた。作曲を楽しみながらも、史上初といつてよい、邦楽器と洋楽器による二重協奏曲をどう構成しようか

と、彼はとても悩んでいるようにみえた。作曲家でもない僕に「一度、楽譜を見て、意見を言ってみよう」と何度も仰ったのは、やはり不安だったのだろう。

結局、初演の日を待たずして一柳さんはこの世を去ってしまったが、はじめてこの曲が鳴り響くのを聴いているうちに、あの独特のフモールが演奏会場いっぱい広がるのがよくわかった。そもそも、考えてみればヴァイオリンと三味線を合わせるというミスマッチ自体が、一柳さんらしい茶目っ気をたたえているではないか。

一柳さんに誘われて、神奈川芸術文化財団の仕事に携わるようになってから、この組織にも彼なら

ではのフモールが漂っているのを感じた。皆まじめに働く組織なのだけれども、何かアンバランスなところがある。そして、そこがとてもいい。僕のような部外者が突然に闖入してきたにもかかわらず、皆がそれぞれのやり方で関わってくれる。

そして今、気づくのだ。一柳さんの音楽を聴くなかで、一柳さんという人とおつきあいするなかで、そして一柳さんが芸術総監督を務めた財団の仕事をこなすなかで、僕もどこかあのフモールに染まってきたのではないかと。もしもこの感覚が正しいとしたら、とてもうれしい。

“争い”の時代と表現

2022年は、沖縄県が本土に復帰して50年となる節目の年でした。2回の世界大戦を経験してからも、様々な地域で争いは起こり、2022年2月に勃発したロシア軍によるウクライナ侵攻は、現在進行形で続いています。

またコロナ禍では排外主義や不寛容といった分断が、日常生活のなかでより顕在化してみえたこともありました。

このような状況が広がる現在を、本誌では広く「争いの時代」と捉え、今を生きるアーティストや文化人の言葉や取り組みを、複数の視点から取材しました。

演劇や美術作品は、私たちに今、何を問いかけているのでしょうか。

スポーツにも、あらためて学ぶことがあるかもしれません。

神奈川県内にも多く残る史跡は、現代にどのように引き継がれているか。

また、地球の生態系のなかで、人間と動植物はどのように関わりあっていたのでしょうか――。

当財団の主催プログラムを、対談やインタビューとともに取り上げた「WORKS」、県内のアートプロジェクトと、動物園取材した「SIGHT」、そして「INTERVIEW」や「COLUMN」を通して、芸術、歴史、スポーツ、生態系などのテーマを編んだ1冊になりました。

読者の皆さまにひもといていただき、「争いの時代と表現」について対話が始まるきっかけとなることを願っています。

KAAT 神奈川芸術劇場プロデュース

『ライカムで
待っとく』

『忘^{ぼう}』をシーズンタイトルに掲げたKAATが沖縄在住の劇作家・兼島拓也さんに戯曲の書き下ろしを依頼した『ライカムで待っとく』。その執筆過程では、米軍基地の街・横須賀を中心に活動する劇団河童座の横田和弘さんへの取材も行われました。上演を終え、二人は何を思うのでしょうか。

作：兼島拓也

演出：田中麻衣子

出演：亀田佳明 前田一世 南里双六 蔵下穂波
小川ゲン 神田 青 魏 涼子 あめくみちこ日程：2022年11月30日～12月4日
(新型コロナの影響で11月27日～29日は中止)

会場：KAAT 神奈川芸術劇場 中スタジオ

主催・企画制作：KAAT 神奈川芸術劇場



取材・文：山崎健太 公演写真：引地信彦

ABOUT

『ライカムで待っとく』は、アメリカ占領下の1964年に沖縄で起きた米兵殺傷事件に取材したノンフィクション『逆転』（伊佐千尋著、新潮社・岩波書店刊）に着想を得て書かれた作品です。当時の資料や基地問題の専門家へのリサーチと、沖縄や横須賀、そして東京に暮らす人々へのヒアリングをもとに、1年の執筆期間を経て、沖縄本土復帰50年となる2022年の末に上演されました。演出を担当したのは沖縄に出自をもつ田中麻衣子。出演した8人の俳優の半数も沖縄出身です。

2022年。物語は、雑誌記者の浅野が沖縄出身の伊礼から自分そ

くりの人物が写った写真を見せられたことをきっかけに動き出します。伊礼の祖父だというその人物は、かつて沖縄で起きた米兵殺傷事件のことを手記に残していました。浅野は半ば押し切られるようにして事件について取材することになりますが、やがてその写真には妻・知華の亡き祖父・佐久本も写っていたこと、そして佐久本が米兵殺傷事件の容疑者の一人だったことが判明します。浅野たちは死者と話せるという金城のもとを訪れ、祖父から話を聞こうとするのですが――。

1964年。友人の嘉数^{かかず}と飲んでいる佐久本のもとに、店の従業員の平が米兵に殴られているという報告^{ほうし}がもたらされます。たまたま居合わせた兄・雄信は止めようと思いますが、佐久本は飛び出していつてしまい、その後、米兵は何者かに殺されてしまいます。その時いったい何があったのでしょうか。

裁判での証言。それぞれが抱える沖縄やアメリカ、日本への思い。そして沖縄戦の記憶。舞台上では現在と過去の沖縄の出来事が交互に立ち上がりますが、取材が進むにつれてそれらは混じり合っていく、浅野自身もいつしか、逃れられない沖縄の物語の渦中に巻き込まれていきます。やがて浅野に突きつけられる理不尽な選択とは――。

対談

兼島拓也

チョコ泥棒主宰
劇作家



横田和弘

劇団河童座主宰
演出・劇作家



兼島拓也さん(左)と横田和弘さん(右)

「沖縄と横須賀には本当に大きな違いがあるんだな」ということを、あらためて感じてショックだった」
『ライカムで待つとく』の感想を聞かれた横田さんは真っ先にこう答えました。作中の「神奈川の人って大

人じゃないですか」というセリフを受けてのことです。これは横浜で働く沖縄出身の伊礼という人物が、横浜育ちの主人公・浅野に向けて発する言葉で、基地のことで「暴れたりする人」がいない神奈川の人は過去に縛られずに前向きで「大人の余裕」があるということです。

横須賀には「どぶ板通り」と呼ばれる商店街があります。京急本線・汐入駅から米海軍ベースに至るその一帯は、戦後しばらくは米海軍向けの店が立ち並び場所でしたが、現在では独特の雰囲気は残しつつもスカジャン専門店などが並ぶ観光地となり、多くの若者でにぎわっています。横田さんは、かつてそこを流れたどぶ川にふたをしたように「街全体が過去から目をそらしたいと思っていないのか」と自らが住む横須賀を省みます。

しかし、このセリフは神奈川の人だけに向けられているわけでは

ありません。自分と同じくらいの、あるいは下の世代が地元・沖縄に対して思っているであろうこと、横須賀の街を見て感じるであろうことを「大人」という言葉に集約したのだという兼島さんは「だからこれはどちらへの皮肉でもあるんです」と言います。

『ライカムで待つとく』は観客に、単純な悲劇として沖縄の物語を消費することを許しません。モチーフとなっている米兵殺傷事件自体が、アメリカ占領下の沖縄で、沖縄県民が加害者に、米兵が被害者になるというある種の「捻れ」をもったものでした。作中では、沖縄の人々の諦めや、権力に順応する様子も描かれています。

「沖縄から観に来てくれた同世代の人たちにはそういう面を描いたことも響いていたようですが、上の世代の人からは反発も含めてまた違った反応があると思います。そういう意味でも、この作品は沖縄でも上演したいと思っています。多くのものを押しつけられ奪われてきた上の世代と、はじめから基地があることが当たり前だった若い世代とではどう

でも考え方は違ってくる。でもそこでどう連帯し、どう体験や思いを引き継いでいけるのか。それは創作者としても沖縄の人間としても引き受けて考えていかなければならないことだと思います」(兼島)

横田さんも自身の体験をふりかえり「僕も戦争を体験していない世代だけど、そのなかでも世代によって戦争の捉え方や米軍への思いは様々に違っている。米軍関係は記録が残っていないことも多い。だからこそ、自分たちの世代が何を体験して何を考えてきたのかを伝えていかなければならないとあらためて思った」と創作への思いを新たにしていました。

沖縄本土復帰50年にあたる2022年は、沖縄に関する作品がジャンルを問わず数多く発表されました。「でも、もっと踏み込んでほしいところをその手前で止まってしまうという作品も多いと感じています」(兼島)。

『ライカムで待つとく』の作中で繰り返し発せられる「決まりだから」という言葉は観客に、沖縄の人々の諦めを強烈に印象づけますが、やがてその言葉は主人公である浅野に、つまりは本土の人間にも向かいます。そして観客が浅野とともに突きつけられる選択の理不尽さは、容易には飲み込めない問いとなって観客のなかに残り続けます。兼島さんは「知らなかった、知らなきやいけ

ないではその次にいかない。単に沖縄のことを考えるのではなく、何か体にしみついて引きずってしまいうような作品を書きたかった。お客さんの反応を見たかぎりでは、半分くらいはそれを達成できたのではないかなと思います。今後作品を通してそういう働きかけをしていきたいし、精度を磨いていきたい」とふりかえりました。

今回の上演をきっかけに、兼島さんのもとには米兵殺傷事件の目撃者の家族からの連絡があったそうで、今後話を聞いていきたいと思っているとのこと。「作品をつくり発表することには、誰かの記憶を引き出したりつながりを生んだりする力もあるんだ」ということを今回実感しました。そこにある可能性も信じながら創作を続けていきたいと思っています」(兼島)。



兼島拓也 かねしま・たくや

劇作家。1989年沖縄県生まれ。チョコ泥棒主宰。主に沖縄県内で演劇活動を行う。2018年に第14回おきなわ文学賞シナリオ・戯曲部門一席、2021年に第31回オーディオドラマ奨励賞入選。今作『ライカムで待つとく』が第30回読売演劇大賞優秀作品賞を受賞、第26回鶴屋南北戯曲賞および第67回岸田國土戯曲賞で最終候補となる。

横田和弘 よこた・かずひろ

劇団河童座主宰。演出・劇作家。神奈川県演劇連盟顧問。横須賀シニア劇団「よっしゃ!!」プロジェクトリーダー。横須賀を中心に横浜・神奈川県で幅広く演劇活動続ける傍ら、演劇ワークショップなどを開催し若手の育成に努めている。「演劇で何が出来るか」をテーマに被災地公演や、各種施設での公演、ファミリーシアターなどに力を入れている。

聞き手・文：山崎健太 写真：加藤 甫

「ドリーム／ランド」

県民ホールギャラリーで開かれた、7名の現代アーティストによるグループ展「ドリーム／ランド」。出展作家の一人、青山悟さんは、ミシン刺繍でつくった1万円札と1ドル札を展示しました。アーティストが今の時代に問うこととは。お話を聞きました。

REPORT

県民ホールギャラリーは、これまで「日常」を多様な視点で切りとった作品群による、3つのグループ展を企画してきました。これに続き、今年度から新たに立ち上がったのが「ランド」をテーマに据えたシリーズです。

「ドリーム／ランド」の夢という言葉には、様々な意味があります。将来の夢という意味の願望や希望、そして寝ている時に見る夢、また「夢のような出来事」といった使われ方をします。本展は国・土地・場所などを意味する「ランド」をタイトルに付し、今後も続く「ランド展」の第1弾となりました。企画者である神奈川芸術文化財団・キュレーターの中野仁詞さんは「ドリームは、深遠な表現の幅がある言葉です。ランドという言葉からは、現在進行形の

参加アーティスト：青山 悟
枝 史織
角 文平
笹岡由梨子
林 勇気
山寄雷蔵
シンゴ・ヨシダ

日程：2022年12月18日～2023年1月28日

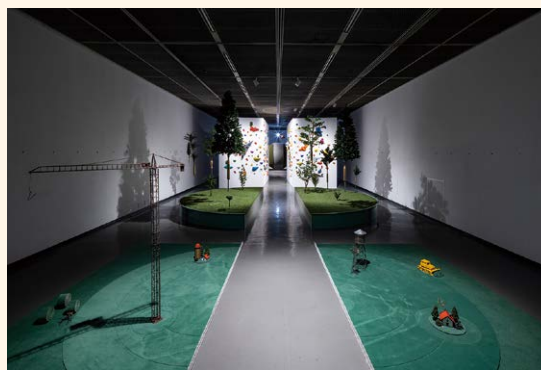
会場：神奈川県民ホール

主催：神奈川県民ホール

取材・文：編集部 展示写真：木暮伸也

ロシアとウクライナ、国同士の紛争なども連想されるかもしれませんが、「ランド」に「ドリーム」をかけ合わせ、人間が今立っている地とはどんな場所なのか、作家の皆さんとともに問いかけたいと思いました」と内覧会で語りました。参加作家は、油画、日本画、インスタレーション、刺繍、映像などを表現の媒体とする、7人の現代アーティスト。キュレーターのコンセプトに作品で応えていきました。

また本展の特徴の一つに、展示空

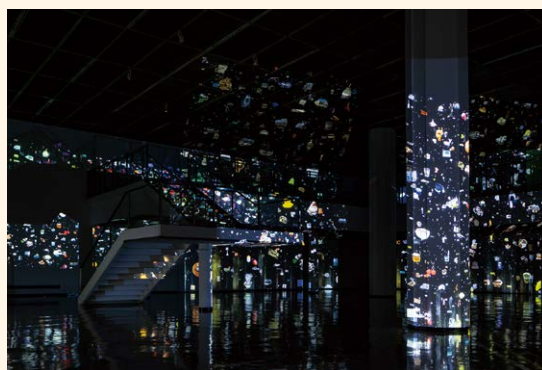


角 文平
『Monkey trail』(2022)



枝 史織
(左)『雷』(中)『竜巻』(右)『虹』(2015)

間をめぐりながらパフォーマンスを行ったささきさん(振付家・ダンサー)とのコラボレーションが挙げられます。このイベントは、同じく中野さんが県民ホールギャラリーで企画した塩田千春さんの個展「沈黙から」(2007年)から始まった「アート・コンプレックス」というプログラムの思想を引き継ぎ、企画したもの。「アート・コンプレックス」は空間芸術である美術作品のなかで、音楽やパフォーマンスなどの時間芸術が実験的にコラボレーションすることで生まれる、新たな表現を大切にしたい企画でした。そこには2022年10



林 勇気
『another world -vanishing point』(2022)

月に逝去した、一柳慧芸術総監督の思想が反映されています。神奈川芸術文化財団で働く職員の間には、フルクサスの時代を生きた故・一柳総監督に影響を受けた人がたくさんいます。中野さんもその一人。内覧会では、「一柳総監督には22年間ご指導いただきました。この展覧会は監督とつくった最後の展覧会です」と思いを語り、来場者とともに一柳総監督が残したものをしのぶ時間にもなりました。



写真：大野隆介

今から2年ほど前、キュレーターの中野さんから本展への出展を依頼された時のこと。「ドリーム／ランド」というタイトルから最初に思い浮かんだイメージは、悪夢のような日常でした。今はだいぶん慣れてしまっただけで、コロナ禍が始まった頃目にもえないウィルスにおびえる、悪夢のような日々が続くなあと感じていて」と青山さんはふりかえります。

工業用ミシンを用いて、女性の仕事としての歴史的文脈もある「刺繍」をメディアとし、人間性や労働をテーマに作品を発表してきた青山さん。本展ではミシン刺繍でつくった1万円札と1ドル札、そして作品制作（1万円札1枚）に要した時間を、東京都の最低賃金に換算した金額を記したタイムカードを展示しました。床の上にはばらばらと置かれた1万円札と対照的に、額縁に入れて飾られた1ドル札。1ドルが150円だった時、実物の1・5倍の大きさに引き延ばしてつくった作品です。「円の価値なんてなくなるのではないかと感じたことがありました。随分

前のリーマン・ショックがわかりやすい例ですが、資本主義は覚めるかもしれない『夢』ですよ。今回の作品は、資本主義の限界を提示する直接的なアプローチ。現実をゴロツと投げ出しました」。

あらゆる分断は資本主義のゆがみに起因しているのではないかと、青山さんは指摘します。今はG A F Aのような大企業が富をもっていて、格差がどんどん広がっている。コロナ禍を経た世のなかでは、実労働をしている人たちの苦しみが見えづらくなっている——。タイムカードの作品は、実労働の最低賃金で生きて

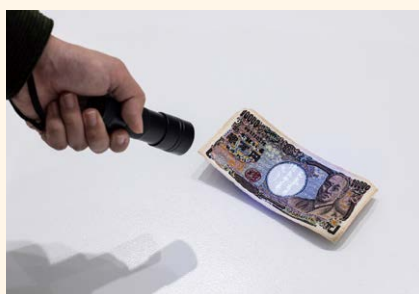
いくことができるのかを問うメッセージでもあります。

世界中が同じような体験をしているステイホームの頃は、皆が他者を気づかう状況もありました。ですがコロナ禍にも慣れてしまった今、分断がより一層可視化されてきたのを青山さんは感じていると言います。「パンデミックが起きてから3年がたち、ロシア・ウクライナ戦争が始まり、現実がさらに悪夢のような様相を帯びてきましたね。作品を通して今ある問題にあらためて向き合い、コミュニケーションをとってほしい」と青山さん。「今の時代を代表する哲学者や思想家たちが語っているように、今の『争

いの時代』を終わらせるためには、『相対主義的価値観を乗り越えて、普遍的倫理観を築くこと』が必要なのは明確で、そのために何ができるのかを考えていかなくてはなりません。戦争を仕掛ける側には、仕掛ける側の論理があるのかもしれないけど、それは人が人を殺す戦争をする理由に値するものでしょうか。アートが、そういった倫理観を形成していくきっかけになることを願いますし、そのためには他者とコミュニケーションをとっていくしかないと思っています」。



青山 悟『Just a piece of fabric』(2022)展示風景



ライトを当てると「見えざるもの、消えゆくものに光を！」というテキストが。「見えない労働者などに捧げるモニュメントのような作品」と青山さん



タイムカードと、制作の様子を記録した映像を、1億円が入る特注のジュラルミンケースに入れて展示した

青山 悟 あおやま・さとる

1973年東京生まれ。ロンドン・ゴールドスミスカレッジのテキスタイル学科を1998年に卒業、2001年にシカゴ美術館附属美術大学で美術学修士号を取得し、現在は東京を拠点に活動。工業用ミシンを用い、近代化以降、変容し続ける人間性や労働の価値を問い続けながら、刺繍というメディアの枠を拡張させる作品を数々発表している。

文：編集部 展示写真：木暮伸也

スティーヴン・ イツサーリス チェロ・リサイタル

ロシア音楽をテーマとしたプログラムで音楽堂の舞台に立った、世界的なチェリストであるスティーヴン・イツサーリス。彼の音楽への思いと、ロシア・ウクライナ戦争をはじめとした現状に対する実感を聞きました。

REPORT

世界的な演奏家たちの名演奏をお届けする「音楽堂ヘリテージ・コンサート」。2022年度の秋シーズン第一弾を飾ったのは、スティーヴン・イツサーリスのチェロ・リサイタルでした。

イツサーリスと神奈川芸術文化財団の交流は、2004年にさかのぼります。現在、演奏を聴くことができるチェリストのなかで、世界最高峰の一人といわれるイツサーリス。ストラディヴァリウスで奏でる演奏は音楽堂の「木のホール」を震わせ、観客を魅了しました。その後、県民ホールでも(2006/2009年)

出演：スティーヴン・イツサーリス(チェロ)
コニー・シー(ピアノ)

プログラム：

ショスタコーヴィチ：チェロ・ソナタ 二短調 op.40

プロコフィエフ：チェロ・ソナタ ハ長調 op.119

ユリウス・イツセルリス(イツサーリス)：チェロとピアノのためのバラード イ短調

ラフマニノフ：チェロ・ソナタ 短調 op.19

日程：2022年9月17日

会場：神奈川県立音楽堂

主催：神奈川県立音楽堂



来日公演を実施。2021年には、自身のルーツでもあるロシア音楽の作曲家たちによる演目を中心とした新たなプログラムとともに、音楽堂の舞台へと帰ってくるはずでした。しかしコロナ禍に見舞われ来日はかなわず、翌2022年2月にはロシア軍によるウクライナ侵攻が勃発。いまだ紛争は終結をみていません(2023年3月現在)。

そして2022年9月、音楽堂での来日公演がついに実現。コンサートでは、ロシア・ウクライナ戦争が起る以前に自身が企画したテーマを変更することはありませんでした。世界で活躍するイツサーリスの久しぶりの来日となり、会場も満席に。

音楽堂ではコンサートにさきがけ、関連プログラム「街なかトークカフェ「イツサーリスからたどる『ロシア音楽』」を8月25日に開催しました。講師に迎えたのは東欧音楽の専門家・伊東信宏先生(大阪大学大学院教授)。映像や音源、質問コーナーを挟みながら、9月のプログラムの中

心に、イツサーリスの祖父でありロシアを代表するピアニストでもあった、ユリウス・イツセルリス(イツサーリス)の人生もふりかえりました。伊東先生はコンサートについて「今年に入ってから、ロシア人の音楽家をコンサートから排除する動きも

ありました。ですがロシア音楽だからといって耳をふさぐことは、何の意味もないことだと僕も思います。音楽史のなかでも素晴らしいロシア音楽を伝えていくという、イツサーリスの音楽家としての姿勢には、共感しています」と語りました。



取材・文：編集部 公演写真：ヒダキトモコ



今も昔も、音楽家といえども自国の政治や世界情勢から切り離されて存在しているわけではありません。2022年2月にロシアによるウクライナ侵攻が始まった当初は、とりわけヨーロッパではウクライナへの配慮および連帯感から、過去のロシア音楽を演奏することを問題視する風潮さえありました。しかし、チェコ奏者のステイーヴン・イッサーリスはそうした考えははかっていると主張します。「現在の戦争は、すでに亡くなっているロシア人作曲家たちの責任ではありませんから」。

「祖父がチェロとピアノのために作曲した『バラード』はとてもロマンティックで、望郷の念に満ちています。ウィーンで書かれ、祖父がたいへん尊敬していたカザルスに献呈されました」

「祖父がソ連を出たのは1922年のことですので、今ウクライナから避難されている方々のように戦争によって国を追われたわけではありませんが、おそらくロシア革命後のソ連の行方に不安を感じていたのだと思います」とイッサーリスは語ります。祖父ユリウスは、まずウィーンに移り住み、その後ナチスによるオーストリア併合を逃れて英国に渡り、ソ連に戻ることはありませんでした。こうして時代に翻弄され国を追われた音楽家の姿に、今のウクライナの人々の苦境が重なり合います。

実はイッサーリスの父方のルーツはロシアとウクライナの双方にあります。祖父ユリウスは現在のモルドヴァ出身のユダヤ系ロシア人、モスクワ音楽院でタネーエフらに学び、その後、1920年代に事実上西側に亡命。祖母は現ウクライナのオデーサの出身で、父もオデーサで生まれました。イッサーリス自身、オデーサを何度も訪れています。



ステイーヴン・イッサーリス

イギリス生まれ。ベルリン・フィルやゲヴァントハウス管弦楽団、ロサンゼルス・フィルなどと共演し、ザルツブルク音楽祭やウィグモアホールなどの主要音楽祭やホールに出演、現代最高のチェリストの一人として比類のない多彩な活動を展開している。HIP(歴史的な奏法)にも強い関心を寄せ、古楽オーケストラにも頻繁に客演。同時に現代音楽にも熱心で、数々の新作の初演を任されてきた。若い聴衆や音楽家のための活動にも情熱を傾け、執筆した3冊の書は、すでに多くの言語に翻訳されている。主たる使用楽器は、イギリス王立音楽アカデミーから貸与された1726年製のストラディヴァリウス「マルキ・ド・コルブロン(ネルソヴァ)」。

聞き手・文：後藤菜穂子 写真：大野隆介

猿島 (神奈川県・横須賀市)

一隻の船に揺られ、たどり着いたのは木々が生い茂る真っ暗闇の無人島。ここ猿島ではアートイベント「Sense Island - 感覚の島 - 暗闇の美術島 2022」(以下、Sense Island)が、2022年11月～12月に開かれました。日没後、自然を感じながら作品を楽しむ唯一無二の体験。今年で3回目の開催となったイベントです。実現に至った背景を、横須賀市職員の皆さまに聞きました。

取材・文：編集部

もともと国が所有していた猿島。

横須賀市の管理になって以降、歴史と自然を体感できるエコミュージアムとしての活用に向け、市は整備をしてきました。2015年に国史跡として文化財指定を受けますが、「旧日本軍の砲台や要塞跡がある猿島を史跡として残すことに疑問の声」をいただくことはありません」と、横須賀市の生涯学習課・川本真由美さんは話します。そうしたなか横須賀市は、残すことの良し悪しを問うのではなく、「戦争の時代があったことを伝える」ことがこの史跡の一つの役割であるという考えのもと、島の活用を進めています。

横須賀の歴史をふりかえると、軍との歩みは切っても切り離せません。軍によってインフラが整備され、軍需産業の発展とともに、横須賀は都市化しました。第二次大戦では猿島をはじめ要塞地帯としての役割を担いましたが、空襲などによる甚大な被害が民間には出ませんでした。終戦後、米海軍横須賀基地が置かれ、現在も基地内で働く市民も多く、まちなかには英語表記の看板が立ち並ぶ。様々なルーツをもつ人がいることが横須賀の日常の風景になっています。

猿島を公園として活用しはじめた当初から、昼間は史跡を見学する「猿島ツアー」のほか、バーベキューなどのレジャーが楽しめる場所として運用をしてきましたが、パノラマテイクス主宰・齋藤精一さん(Sense Island)のプロデューサーとの出会いから、それまでは開いてこなかった「夜の猿島」に着目。月明かりのなかでの



江戸時代から台場(砲台)が多く設置されていた猿島。[Sense Island]では砲台跡を用いて映像作品などを展示した
オウ・シャオハン「Life in the Moonlight」写真：Naomi Circus

アートイベントに取り組みことになりました。企画課・下山麻里さんは「上地克明横須賀市長はアートや音楽、スポーツなどで、まちと市民を元気にする取り組みを進めています。私は、そんな文化的な取り組みと猿島を組み合わせたという思いがありました」と話します。

前例のない試みに向けて、市ではイベントを実施する企画課、史跡を保存する生涯学習課、都市公園としての猿島を管理する公園管理課の3つの部門がチームを組み、アートというこれまでにない切り口で猿島の魅力を発信する取り組みの実現へ向けた話し合いがスタート。「夜の無人島が舞台ということもあり、暗闇のなかで歩く際に危険がない照明配置となるよう協議するなど、安全には十分考慮しました」と公園管理課の福田航大さん。開催前には市職員から参加者を募り、実際に歩いてみて危険がないかテストをするなど、安全管理に腐心したそうです。

横須賀市には同じく国史跡の千代ヶ崎砲台跡をはじめ、猿島以外の近代化遺産も多く残っています。今後は猿島に限らず広く市内の歴史遺産を活用していくことも視野に入れ、横須賀の魅力を発信していきます。

コラム 近代文明発祥の地としての横須賀

米海軍横須賀基地の印象が強い横須賀。歴史をさかのぼると江戸幕末期から、現在の基地内に日本初の近代的な工場「横須賀製鉄所」が建設され、この場所が近代文明発祥の地となりました。製鉄所建設のきっかけは、横須賀・浦賀への「ペリー来航」などによる国防の危機感でした。幕府の役人が、これを機にワシントンの造船所などを視察。江戸時代までの木と紙の文化から、レンガや鉄などによる近代工業を推進することに。ネジなどの細かな部品から軍艦まで、様々な工業製品をつくるのが可能になったのです。その後、同製鉄所は旧日本軍の施設として多くの軍艦を建造しましたが、第二次大戦後、この地は米海軍基地になりました。

現在、横須賀市では猿島をはじめ、旧横須賀製鉄所や浦賀ドックなど、市の歴史にまつわる史跡や施設を周遊する「よこすかルートミュージアム」という新しい楽しみ方を打ち出しています。「皆さんがまだ知らない、横須賀から始まった日本近代化の歴史に触れてもらおうきっかけになれば」と企画課・下山さんは話します。



砲台稼働時は大部分の木々が伐採されていたが、戦後時間をかけて緑が生い茂る島となった
提供：横須賀市

猿島 東京湾唯一の自然島であり、湾内最大の無人島。島全体に生い茂る豊かな自然のなか、レンガ積みトンネルや砲台跡などの旧軍事施設が残っており、唯一無二の神秘的な雰囲気をつくり上げている。散策のほかにもバーベキューや釣りなど、四季を通してアウトドアアクティビティを楽しむことができる。

よこはま動物園ズーラシア(神奈川県・横浜市)

取材・文：編集部
写真：加藤 甫

「アジアの熱帯林」「オセアニアの草原」など複数のゾーンに分かれ、世界を旅するように楽しめる「よこはま動物園ズーラシア」(以下ズーラシア)。繁殖などの研究にも取り組んでいます。2021年には国の天然記念物であるツシマヤマネコの人工授精にも成功し、世界から大きな反響を呼びました。人間の営みと動物の関係にまつわるお話を、村田浩一園長に聞きました。

日本で初めてオカピを公開したことも知られる、国内でも最大級の動物園・ズーラシア。「横浜動物の森公園」のなかにあり、森林と一体になった自然豊かな環境が魅力です。動物園に行くと目の前の動物をかわいと感じ、「大切にしよう」と優しい気持ちをもつことは、実は自分たち人間の生活や社会を大切にするということ深くつながっています。地球環境のなかで人間が生きていくためには、生物の多様性が維持されていることが重要だからです。「地球は生物の絶滅も経験しており、何万種もの生物が生まれては消えました。ただ当時は一種が減るのに数万年、数十万年かかっていた。それが産業革命以降、種が絶滅する期間が急速に早まったんです。1日に100種といわれるようになり、今は数時間に一種が減っているという説もある」と村田園長は指摘します。

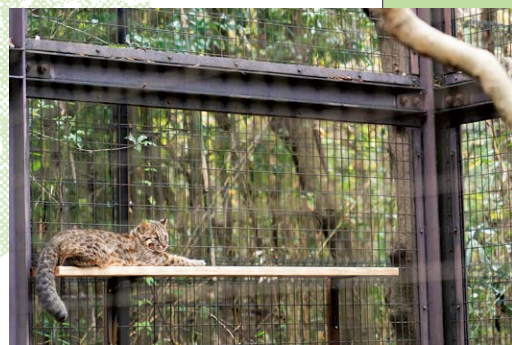
人間以外の種が減り、生物の多様性が失われた時に何が起るか。本来、野生動物についていた病原体が、人間をターゲットにするようになる。また開発のために人間が森林地帯へ立ち入ることで、野生動物との接触機会が増える——。こういった要因が絡み合い、スペイン風邪ウイルスから新型コロナウイルスに至るまで、もともと動物がもっていた病原体が人間の生存環境を脅かすようになりました。



元は動物園の獣医師だったという村田園長。動物写真の撮影の名手でもある

ズーラシアが人工授精に成功したツシマヤマネコは、東アジアから東南アジアのベンガルヤマネコにルーツをもちます。長崎県・対馬で孤立した当時は、森林でネズミや野鳥などを追いかけて生きていました。肉食獣が生きていたためには、餌となる生物、さらにその餌となる生物が生きていられる環境が整っている必要がありますが、次第に対馬でも開発が進み森林が伐採され、ツシマヤマネコの餌となる生物が生きていけなくなりました。そして産業道路などでは、ツシマヤマネコの交通事故、いわゆるロードキルが多発。1998年には絶滅危惧種に指定され、現在は100頭程度しか生存していないともいわれています。

ツシマヤマネコの人工授精への取り組みについて村田園長は「動物が自然の摂理で滅びることを止めたいとは思いません。ですが人間の活動によって滅んでいくことは、何らかのあたりで阻止しなくては」と思いを語ります。人工授精だけでなく、希少動物の精子や受精卵を凍結保存して未来の技術に託すなど、世界中の動物園があらゆる手段で様々な動物の種を守る研究をしているそうです。ズーラシアでは毎年半年間にわたって月1回、ズーラシアスクールという小学校中高学年の子ども向けのプログラムを開いています。「本気になれば地球も救える」と村田園長「政治や経済で何かを変えていくことは難しい。最終的には一人ひとりが自分の生活を見直していくしかないでしょう。そのための保全教育も重要です。未来を担う子どもたちに、自然や動物の価値を伝えていきたいですね」。



ツシマヤマネコはズーラシアで見られる(日本の山里ゾーン)

コラム 人間の戦争に巻き込まれた動物たち

ベトナム戦争では枯葉剤によって甚大な森林破壊が起こり、生息していたアカアシドゥウラングールが多く命を落としました。動物愛護の国といわれるイギリスも、ペンギンの貴重な生息地であるフォークランド諸島を紛争で爆撃したことがあります。そしてウクライナにはアスカニア・ノヴァ自然保護区があり、絶滅しかけていたヨーロッパバイソンを復活させた歴史がありました。その活動にはロシアも協力していたそうですが、ロシア・ウクライナ戦争ではウクライナの豊かな自然環境にも、甚大な被害が出ています。

「人間は戦争になると、これまで大切にしていたことを忘れてしまふんです。プラネタリー・バウンダリー(地球の限界)を超えてしまったのは人間が自ら引き起こしたこと。生物たちの進化に、果たして人間は適応しているといえるのでしょうか」と村田園長。地球環境について私たち一人ひとりができることを、立ち止まって考えていかなければなりません。



インドゾウ。50年後に絶滅するという説も[アジアの熱帯林ゾーン]

よこはま動物園ズーラシア 「生命の共生・自然との調和」をメインテーマに掲げるよこはま動物園ズーラシア。日本最大級の広大な敷地に世界の希少動物を数多く飼育し、その生息環境を再現している。園内は世界の気候帯・地域別に8つのゾーンに分かれており、世界一周の動物旅行を楽しむことができる。

日常から戦争まで様々なテーマを描き、

時代に応答した作品をつくり続けている漫画家の今日マチ子さん。

コロナ禍にイラストによる「わたしの#stayhome日記」をSNSで発表し話題を呼びました。

今感じていることやこれからの作品づくりについて、お話を聞きました。

「2020年4月から発表している『わたしの#stayhome日記』は、『Distance』『Essential』の2冊にまとめられていますね。描こうと思ったきっかけを教えてください。」

コロナ禍で最初の緊急事態宣言の時の状態を、動揺している自分の気持ちなども含めて「これは絶対に記録に残しておかねばならない」と思って始めました。私は戦争に関する作品を描く時に様々な資料にあたりますが、起きてしまった何か大きな出来事についての資料は残っていても、その後どうなっていたかはあまり記録が残っていないことが多い。コロナ禍について描くなら、どうやって始まり、どうやって終わっていったかをちゃんと記録したいと思いました。例えば百年後の人たちに残せたらという気持ちで続けています。過去の戦争を作品に描く時、それを体験していない自分が戦争を都合よくフィクションに仕立てているのではないかという気持ちはいつもどこかにあります。だからこそ逆に、自分が当事者でいるコロナ禍の状況を作品として残していきたいとも思いました。

「3年間描き続けてきていかがですか？」

年を重ねるにつれ、いち市民としての自分の無力さを強く感じるようになりま

PROFILE

漫画家。文化庁メディア芸術祭審査委員会推薦作品に4度選出。

2014年に手塚治虫文化賞新生賞、2015年に日本漫画家協会賞大賞カートゥーン部門を受賞。

コロナ禍の日常を絵日記のように描いた「Distance わたしの#stayhome日記」は

2022年1月に「報道ステーション」にて特集で紹介。

近著に「夜の大人、朝の子ども」「Essential わたしの#stayhome日記 2021-2022」。



© 今日マチ子



互いに大変な状況のなかにいるからこそ、世界中の人と共有できるものもある

漫画家

今日マチ子 Machiko Kyo

「今後はどのような作品を構想されていますか？」
社会的に立場の弱い人が絶望せずにどうやって生きるかということをやっと考えていて、それと戦争を絡めた作品を描きたいですね。私はけっこう心配性で（笑）10代の頃から、戦争が起きたらどうしようという隅で考えていたんです。そうして今、実際にコロナ禍やロシア・ウクライナ戦争に直面してしまっている。生きていけば予期せぬ災害や戦争に誰しも直面する可能性がある。作品を描くことでそれに備え、心配を和らげているのかもしれない。

「特にコロナ禍以降、自分の声は公にはほとんど響かないという諦めのようなものがあつたんです。でもSNSで発信した『わたしの#stayhome日記』への反応を見ると、互いに大変な状況のなかにいるからこそ、世界中の人と共有できるものもある。それを知ることができたのは私にとっては大きな出来事でしたし、そういう小さな連帯の感覚にはすごく救われてもいます。」



今日マチ子「Distance わたしの#stayhome日記」(in press, 2021)

主に60歳以上の高齢者が参加するスポーツの祭典・全国健康福祉祭(ねんりんピック)。

「ねんりんピックかながわ2022」では神奈川県が初めて開催地となりました。

元プロサッカー選手で、ねんりんピック広報キャラバン隊を務めた波戸康広さんに、

平和な“争い”ともいえるスポーツの魅力についてお話を聞きました。

約1年間、ねんりんピック広報キャラバン隊の活動を通して感じたことを教えてください。

プロ選手には年齢の壁がありますが、競技としてのスポーツに年齢は関係ありません。スポーツは趣味としても楽しめますし、より高みを目指すという目標や生きがいにもなる。身体を動かすことは健康にも役立ちます。そういったスポーツがもついろいろな魅力をあらためて感じた1年になりました。ねんりんピックには将棋などの競技もあって、80歳以上の方と将棋をされたこともありました。その場合は参加者にとって、負ければ悔しいし、自分のもてる力をぶつける真剣勝負。そして競うだけでなく、競技をとおして交流が生まれ、刺激を与え合う場でもありました。活動を通して感じたテーマは“人生を楽しむ”ことですね。

元日本代表選手の視点から、サッカーにおける“争い”とはどのようなものでしょうか。

国を背負って戦う時は、言葉にならない重圧を感じながらプレーをしますし、11人に選ばれて戦えることに誇りをもって、もちろん日本を絶対に勝たせるんだという思いでピッチに立ちます。ですがスポーツが素晴らしいのは、笛が鳴った時はノーサイドでお互いの健闘をたたえ

波戸康広 Yasuhiro Hato

横浜F・マリノス アンバサダー



決められたルールのなかで戦うからこそスポーツでは
笛が鳴ったらノーサイド

PROFILE

1995年から2011年までプロサッカー選手として活躍。
横浜フリューゲルス、横浜F・マリノス、柏レイソル、大宮アルディージャでプレー。
元日本代表選手。
2014年にJリーグ功労選手賞を受賞。
現在は横浜市、横須賀市、大和市をホームタウンとする
プロサッカーチーム「横浜F・マリノス」のアンバサダーとして精力的に活動中。



2022年シーズン優勝を果たした横浜F・マリノスの選手たち
©1992 Y.MARINOS

合う。ワールドカップでは国と国が戦いますが、決められたルールがあってそのなかでプレーをします。だからこそ試合が終われば仲良くなれるんです。Jリーグではどのチームにも様々な国籍の選手がいます。F・マリノスでもそれぞれの国の文化を尊重し合いながら、お互いのいいところを見て生活していますね。

2022年シーズン、F・マリノスは
見事リーグ優勝を果たしました。

F・マリノスのサポーターは、苦しい時ほど選手を支えてくれます。4連敗を喫した厳しい時期でも、ブーイングがありませんでした。選手たちもその気持ちに応えようと奮起することができました。優勝は、ファン、サポーター、クラブ、そして現場の選手たち、我々メディアで広報活動をするスタッフみんなの気持ちが一つになった証です。諦めずに戦う選手たちの姿は、見る人の勇気や活力にもなります。スタジアムに、ぜひ一度足を運んでみてください。

大曾根家の母・秋津莊の娘

平野正裕

【ひらの・まさひろ】1960年静岡県生まれ。東海大学大学院修了後、1986年横浜市史編集室勤務。1992年横浜開港資料館調査研究員となり、のち主任調査研究員。経済史・文化史を担当。2015年横浜市史資料室に移り、2020年退職。

日本人の心の美しさ・健気さを一貫して追求した映画監督の木下惠介は、太平洋戦争の被害が深刻化しつつある時期に撮影した陸軍省後援映画『陸軍』（昭和19年12月公開）の終盤で、戦地に赴く隊列に息子の姿を見つけ、その無事を祈って行進に追いつけず涙して見送る母親（俳優・田中絹代）を、一言のセリフも介さずに描きました。映画は当時の国策にのっとった内容でしたが、木下にとつて息子の無事を願う母の切なるシーンだけが重要でした。しかしこの場面が「女々しい」と情報局にいらまれて、木下は映画監督としての将来を断念します。その後8ヶ月して日本が戦争に敗れて時代が転換すると、木下は直ちに次作『大曾根家の朝』にとりかかります。公開は敗戦から半年後の昭和21年2月でした。

描かれたのは昭和18年から20年の直近の時代、舞台は日清・日露戦に勲功のあった陸軍少将を祖父にもつ大曾根家。父は大学教授で自由主義者でしたがすでに亡く、未亡人の房子（杉村春子）と一郎・泰二・悠子・隆の三男一女の生活は、昭和18年のクリスマスにピアノを囲んで「きよしこの夜」を歌い祝うような家風でした。しかしこのような聖夜に、時勢に批判的な文章を書いた一郎は思想犯として収監され、悠子は婚約者の実成（みななり）を戦争にとられて

しまっています。

兄弟の叔父・大曾根一誠（小沢栄太郎）は、職業軍人で陸軍大佐でした。軍国主義の威風を吹かせ、一郎逮捕を家の恥だとして、横暴にも実成家にまで出向いて悠子との婚約を解消させてしまっています。

翌19年、画家志望の次男・泰二も召集されて兵役に就きますが戦地で病を得てその後死亡。空襲で家を焼かれた一誠夫妻が大曾根家に同居することとなりますが、かねてから自由な家風が面白くない。一誠は同居に際して房子に「あなたが嫁に来られてから大曾根家の家風は一変しましたなあ」と切り出し、「兄貴の自由主義は付け焼き刃にすぎなかった」が「あなたの場合は貿易商を二両親にもたれ、ご自身は横浜の外人の学校を出られて、身についたものでした」と義姉に対し、いんぎんな口調で非難します。そして純真で感化されやすい三男・隆の海軍志願には手放しで満足の意を表すのでした。

昨年末に亡くなった吉田喜重監督の代表作『秋津温泉』（昭和37年6月公開）は、山陰の山奥の旅館が舞台です。戦時下で湯治客はなく、軍医の宿舎となっている秋津荘に、空襲で郷里・岡山の実家を焼かれた河本（長門裕之）が転がり込みます。河本は小説家志望でしたが、結核で東京での大学生

活を逃れて帰郷したのでした。その夜、夜具をおさめる蒲団部屋をあてがわれた河本のもとに旅館の娘、新子（岡田茉莉子）が逃げてきます。新子は軍医らの酒席で「日本が負ける」と口を滑らせたようでした。「婦女子の妄言とはいえ、けしからん」と怒声をあげて日本刀を振り回していた軍人がなだめられて酒席に戻ると、新子は自身の身の上を河本に語りはじめます。「私の3月に女学校卒業するまで横浜にいたのよ……。こんな山の中来るの嫌だったけど、空襲はひどくなるし……。お母さんが死んだから来たのよ……。この義理のお父さん、私嫌いだったのよ」。

お下げ髪をもてあそびながら、開けっぴろげな言い方で、初対面の河本に語ります。それは軍人を前に「日本は負ける」と口を滑らせかねない、無垢で無防備な明るさをたたえ、生きることに真剣に向き合っていた河本の心も動かすのでした。

『大曾根家の朝』の房子と『秋津温泉』の新子。日本映画の名作に登場するこの二人の女性は年齢こそ違い、いずれも青春期を横浜の自由で清新な雰囲気の中で過ごした、軍国主義に馴染まず、軍国主義を最も苛立たせる存在の女性でした。そして新子と同じ世代の大曾根家の娘・悠子も、叔父・

一誠が工場労働に代わる安逸な事務職に就けても「居心地が悪い」と口にし、財産家の結婚相手を紹介しても決して肯んじない、強い自由意思を発露するものでした。

『大曾根家の朝』では、日本が降伏した虚脱感のなかで、三男・隆が敗戦前日の特攻で散ったことが知られます。一誠夫妻に対して諸事遠慮がちであつた房子は、ほとぼしるような強さで家から出ていくことを一誠に言い渡し、大曾根家にとつての戦争責任を明らかにするのです。そしてその直後、悠子の婚約者・実成が帰還。長男・一郎も釈放され、大曾根家に「朝」が訪れます。

対して秋津荘の新子は、戦後山奥の旅館を継いで、数年に一度訪れてくる河本を待ちくたびれて生気を失っています。河本も世俗の垢にまみれていきま。何度目かの再会のおと、新子は秋津の溪谷で手首を切り、河本の腕のなかで骸を横たえますが、敗戦直後の無垢な時代に魂を共振し合った河本は、その自死をまったく理解できないで終ります。

「戦争は女の顔をしていない」ことを日本映画のスクリーンに濃厚に示した二人の女性の運命は、まことに対照的でした。



REGULAR FEATURE

本誌では、毎号以下のコンテンツをお届けします。

アートシーンプレイバック

長引くコロナ禍でも開催された注目すべき音楽プログラムや、
苦労を重ねながら続けられる演劇活動から、
県内の2022年下半期のアートシーンをふりかえります。



C × (シー・バイ) シリーズ

2021年の春に始まったクラシック音楽のシリーズ「C × (シー・バイ)」から、
第3回目となる「C × C(シー・バイ・シー)作曲家が作曲家を訪ねる旅」を紹介します。



公演の舞台裏

普段は縁の下の力持ちとして様々なかたちで公演を支え、
「舞台裏」で活躍するスタッフの技術やその仕事について取り上げます。
今回は[空間デザイナー編]をお届けします。

アートシーン ▶ プレイバック

2022年下半期の音楽プログラムをふりかえる

ウィズ・コロナも3年目となった2022年の下半期には、神奈川県内でいくつもの注目すべきコンサートやオペラ、音楽祭が開催されました。そのなかから「節目」や「始まり」を感じさせたイベントをピックアップしてご紹介します。

文：八木宏之（音楽評論）

神奈川県民ホール
開館50周年記念オペラシリーズ Vol.1
ロバート・ウィルソン／
フィリップ・グラス
『浜辺のアインシュタイン』

音楽と言葉と身体表現の交錯がオペラ概念をも覆す『浜辺のアインシュタイン』。指揮者のキハラ良尚は約4時間に及ぶ長大な作品を、最後まで緊張を途切れさせることなく見事にコントロールし、ヴァイオリニストの辻彩奈も果てしない「反復」を強い説得力をもって奏でました。演出、振付の平原慎太郎は、透明のビニールを効果的に用いて「3.11」を連想させるイメージを作品に重ね合わせ、2022年に『浜辺のアインシュタイン』を再演する意味を示しました。

会場 | 神奈川県民ホール
日程 | 2022年10月8日～9日
主催 | 神奈川県民ホール



写真：加藤 甫

音楽堂室内オペラ・プロジェクト第5弾 『シッラ』全3幕 日本初演

ローマの暴君シッラの改心を描くこのオペラは、台本の説得力が乏しく、なかなか上演の機会に恵まれません。が、彌勒忠史による歌舞伎やサーカスの要素を取り入れたダイナミックな演出が、300年以上前につくられたオペラに新たな命を吹き込みました。ピオンディはエウローパ・ガランテと世界トップクラスの歌手たちから、火花を散らすような鮮烈な音楽を引き出し、ヘンデルのオペラを観る喜びを教えてくださいました。

会場 | 神奈川県立音楽堂
日程 | 2022年10月29日～30日
主催 | 神奈川県立音楽堂

写真：ヒダキモコ



2022年の神奈川県民ホールのクラシック音楽シーンは「節目」や「始まり」の多い一年でした。県民ホールは、2025年の開館50周年に向けて記念オペラシリーズをスタート。その第1弾として、ミニマル・ミュージックの代表的作曲家であるフィリップ・グラスと、数々の前衛的舞台作品で知られる演出家ロバート・ウィルソンによるオペラ『浜辺のアインシュタイン』が上演され、大きな話題となりました。『浜辺のアインシュタイン』が日本で上演されるのは1992年の日本初演以来2度目。10月8日の上演初日の休憩中には、神奈川県芸術文化財団の芸術総監督で戦後を代表する作曲家・一柳慧の逝

去の報が入り、この日は日本のコンテンポラリー・ミュージックにとつて忘れられない1日となりました。

音楽堂では、ヘンデルのオペラ『シッラ』の全3幕 日本初演が行われました。ファビオ・ピオンディ率いるイタリアの古楽団体エウローパ・ガランテを招いて行われたこのプロダクションは、元々は2020年2月に上演が予定されていたが、コロナ禍によって中止となり、ようやく2年半越しで日の目を見ました。カウンターテナーとしても活躍する演出家の彌勒忠史による歌舞伎とバロック・オペラの融合は注目を集め、古楽のマニアだけでなく、多くの音楽

ファンが詰めかけました。

神奈川県を代表するオーケストラ、神奈川フィルハーモニー管弦楽団は、2022年4月に沼尻竜典を音楽監督に迎え、新体制をスタートさせました。8年にわたって常任指揮者を務めた川瀬賢太郎からバトンを引き継ぐ沼尻は、幅広いレパートリーと豊富な経歴を誇るマエストロです。県民ホールでのシヨスタコーヴィチの交響曲第8番の鬼気迫る演奏は、このコンビの相性の良さを強く印象づけました。本拠地、横浜みなとみらいホールを中心に、神奈川県各地でこれからたくさんさんの名演を聴かせてくれるでしょう。シンフォニックなレパートリーだけでなく、沼尻の得意とするオペラでの共演にも期待が高まります。

神奈川県を拠点に活動するプロ・オーケストラは神奈川フィルだけではなくありません。ミューザ川崎シンフォニーホールを本拠地にする東京交響楽団も、名前こそ「東京」交響楽団ですが、神奈川の音楽シーンに欠かすことのできないオーケストラといえるでしょう。そんな東響が音楽監督のジョナサン・ノットとR・シュトラウスのコンサート・オペラシリーズをスタートし、その初回となる『サロメ』が11月にミューザ



写真：藤本史昭

横浜みなとみらいホールリニューアル記念事業

沼尻竜典指揮 神奈川フィルハーモニー 管弦楽団

横浜みなとみらいホールは1年10ヶ月の改修工事を経て、2022年10月にリニューアルオープンしました。リニューアル式典直前にスプリンクラー事故が発生するなど困難に見舞われましたが、10月29日に予定通りリニューアルコンサートを開催。沼尻竜典指揮神奈川フィルハーモニー管弦楽団が、三善晃とR・シュトラウスの山にちなんだ大曲を、生まれ変わったホールいっばいに響かせました。オーバーホールを経て再び命を宿したパイプオルガン「ルーシー」も、R・シュトラウスの《アルプス交響曲》で輝かしい音色を聴かせてくれました(オルガンの演奏は2022年4月から第2代ホールオルガニストを務める近藤岳が担当)。

ジョナサン・ノット指揮 東京交響楽団 R・シュトラウス 歌劇『サロメ』全1幕

R・シュトラウスのオペラはオーケストラにとっても、歌手にとっても大変な難曲。世界的なサロメ歌いとして知られるグリゴリアンの圧巻のパフォーマンスとともに、ノットと東京交響楽団の緻密な演奏にも熱狂的な拍手が送られました。2014年から信頼関係を築いてきたこのコンビが満を持して挑むR・シュトラウスのコンサート・オペラシリーズ、今回は2023年5月の『エレクトラ』です。

会場 | ミューザ川崎シンフォニーホール
日程 | 2022年11月18日
主催 | 川崎市、ミューザ川崎シンフォニーホール

会場 | 横浜みなとみらいホール
日程 | 2022年10月29日
主催 | 横浜みなとみらいホール



写真：池上直哉

「箱根おんがくの森2022」

音楽祭の実行委員長を務める大光嘉理人はヴァイオリニスト。アートディレクターの布施砂丘彦はコントラバス奏者で、批評家としても活躍しています。布施は湯河原町出身で、小田原のジュニアオーケストラで演奏した経験を持ち、神奈川県西部にクラシック音楽の文化を根づかせたいと「箱根おんがくの森」を始めました。箱根湖尻アートビレッジをメイン会場に、箱根の自然と歴史がクラシック音楽と重なり合う「箱根おんがくの森」は、隔年開催で、2024年度に第2回の開催を目指しているとのこと。

会場 | 箱根湖尻アートビレッジ、NARAYA CAFE、
仙石原文化センター
日程 | 2022年8月5日～7日
主催 | 箱根おんがくの森 実行委員会



写真：蛍光資料

アートシーン ▶ プレイバック

2022年下半期の演劇プログラムをふりかえる

長引くコロナ禍のもと、様々な苦労を重ねながらも県下の演劇活動は続いています。
ここでは2022年下半期に上演された、歴史や地域に向き合う作品、シニア劇団の公演をご紹介します。

文：鈴木理映子（編集者・演劇ライター）

KAAT 神奈川芸術劇場プロデュース ミュージカル『夜の女たち』

戦後の混乱期の夜の街を背景に、「転落」を強いられながらも生き抜く女性たちを描いた溝口健二の同名映画をミュージカル化。敗戦を経た男たちが抱く潜在的な恐れや不安、いともたやすく社会の周縁に追いやられる女性たちの立場に着目した巧みな構成で、骨太な題材とミュージカルとしてのエンターテインメント性を両立させました。

会場 | KAAT 神奈川芸術劇場 ホール

日程 | 2022年9月9日～19日

（新型コロナの影響で9月3日～8日は中止）

主催 | KAAT 神奈川芸術劇場



写真：細野晋司

「歴史教科書 常軌を逸し 共産主義者を独立運動の闘士として賛美」
"History textbook is deviant, celebrates communists as independence fighters."



写真：前澤秀登

ファイブアーツセンター 『仮構の歴史』

かつて、マラヤ連邦の独立を巡り、武装闘争を繰り広げたマラヤ共産党の元党員たち。彼らのインタビューを出発点に、その後のマレーシアの歴史教科書における記述が紐解かれます。語られず、時には書き換えられ、消去される出来事、人々の記憶。歴史の空白と、上演中床に施されるライブペインティングが二重映しになり、私たちの生きる現在に鋭い問いを投げかけました。

会場 | BankART KAIKO

日程 | 2022年12月14日～17日

主催 | 横浜国際舞台芸術ミーティング実行委員会

「Y P A M I 横浜国際舞台芸術ミーティング」は、実演芸術の創造、国際交流に携わるクリエイター、制作者が集う、アジア随一の交流拠点です。今年は、コロナ禍のもと強化されてきたオンラインでのコミュニケーションツールに加え、実際に顔を合わせての対話が可能なミーティングポイント、Amazon Clubも復活し、様々な出会い、議論の場として機能しました。また、会期中に上演された4つの主催公演のうち、横浜中華街に関わる人々に取材し、共につくりあげたダンス作品『ジャスミンタウン』は2021年のY P A M I、ファイブアーツセンター（マレーシア）

KAATの2022年のシーズンタイトルは「忘^{ぼう}」。せわしない日々のなかで足を止め、忘れてはならない記憶、歴史と向き合おうとする姿勢は、敗戦後の混乱を生き抜く女性たちの哀しみと逞しさを描く溝口健二の同名映画のミュージカル版『夜の女たち』、沖縄在住の若手劇作家・兼島拓也が書き下ろした『ライカムで待つとく』といった作品にも鮮やかに反映されていました。とりわけ後述するY P A M Iの連携プログラムでもあった『ライカムで待つとく』は、2022年に本土復帰50年の節目

を迎えた沖縄と本土との間に今もあり続ける溝、その不条理を、SFミステリー調の展開で観客に体感させ、高く評価されました（6ページ参照）。

チーム・チープロ

『京都イマジナリー・ワルツ』

西洋化の象徴としての「ワルツ」が、男性客のための遊びになり、やがて猥褻なものとして禁じられていく過程を映像やテキストで示しつつ、観客との想像上のペアダンスを試みる実験作。三拍子を奏でる鴨川の水音を介し、共鳴し合いながらも、触れ合うことはないパフォーマーと観客の不安定な関係が、現代の身体のありようを照らし出しているようでした。

会場 | ST スポット

日程 | 2022年12月1日～5日

主催 | チーム・チープロ



写真：岡 はるか



PLAY

横須賀シニア劇団「よっしゃ!!」

『いっしょに行こう…ネ!～三部作～』

電車の中の風景を起点にした2作と、人の生涯を見守る杉の木の話の3本立て上演は、どれもメンバー自ら台本も手がけてあって、内容も登場する人々の佇まいも、ごく身近で親しみやすいものでした。歌や踊りを交えた構成も明るく前向きで、演劇を通じて日々の暮らしを楽しむ姿勢が伝わってきました。

会場 | 横須賀市立青少年会館ホール

日程 | 2022年7月9日～10日

主催 | 神奈川県 横須賀シニア劇団「よっしゃ!!」

による『仮構の歴史』は、TPAM 2019（現・YPAM）でのワーク・イン・プログレス公演を発展させたもので、（新型コロナウイルスの影響による公演中止、上演形態の変更はありましたが）新たに企画されたオルタナティブ・イン・イデオロギー（仮）のワーク・イン・プログレス公演とも併せ、地域や歴史と向き合った継続的な取り組みの意義を感じさせました。

なお、YPAM会期中には、無審査・公募制のフェスティバル「YPAMフリンジ」も開催。そのなかでも、小劇場演劇やコンテンポラリーダンスの若手の公演を多くラインアップするSTスポットで上演されたチーム・チープロ『京都イマジナリー・ワルツ』は、リサーチによるテキストと映像、目の前に立つパフォーマンスの存在が織りなす「体験」

が印象的な作品でした。同劇場では振付家の木村玲奈と演出家の萩原雄太による共同リサーチ「ダンスと演出」とその報告会も行われており、今後もジャンルにとらわれない表現が生まれてくることでしょう。

また、伊勢崎町商店街と大岡川の間に位置し、スタジオ、宿泊施設、劇場を併設するアートセンター、若葉町ウオーフは、2022年で開場5周年を迎えました。12月に予定されていた記念企画の第2弾、波止場のひとり舞台『森の直前の夜』（佐藤信演出）は中止となってしまいました。が、街に根を張りながら、様々な文化を受け入れ、発信する「プラットフォームとしての存在感に変わりはありません」。

年齢や障がいなどにかかわらず、子どもから大人まですべての人が、舞台芸術に参加し楽しめる県の共生共創事業。そのシニアプロジェクトとして始動した、横須賀シニア劇団「よっしゃ!!」、綾瀬シニア劇団Egoは、約2年半ぶりの有観客上演を実現。小田原シニア劇団チリアクオールデイーズも2023年の年明けに初の有観客上演を行いました。長引くコロナ禍による活動制限を経てなお（経たからこそ）、前向きに演劇を楽しむ姿に勇気づけられます。



写真：藤本史昭

C×C(シー・バイ・シー) 作曲家が作曲家を訪ねる旅 Vol.3

山根明季子×ジョン・ケージ[生誕110年、没後30年]

会場 | 神奈川県民ホール 小ホール 日程 | 2022年9月10日

神奈川県民ホール「C×C(シー・バイ)」シリーズから、過去の偉大な作曲家(Composer)と、今を生きる気鋭の作曲家(Composer)が交錯する「C×C作曲家が作曲家を訪ねる旅」を紹介します。その第3回「山根明季子×ジョン・ケージ」は2022年9月10日に開催され、独自の作曲技法やテーマ性が高く評価されている山根さんが、生誕110年、没後30年を迎えたジョン・ケージと交錯しました。もともとケージには共感を抱き影響を受けていたという山根さん。ケージと対峙して、二つも新作を初演した今回のコンサートはどのような機会になったのでしょうか。

この日演奏されたのはジョン・ケージを3曲、山根明季子を3曲。まず演奏されたケージの《ザ・ビートルズ1962-1970》では事前に録音された音に生演奏が重なり、ケージの「同時多発性」が躍如となります。続いて初演された山根さんの《状態No.3》はケージに呼応して、同じく「同時多発性」がテーマの作品。実は言葉だけの指示(「テキストスコア」)で書かれていて、楽譜上には「(奏者が選んだ)任意の既成楽曲を複数同時に演奏する」と指示されているのだそう。

「状態No.3」は私は一音も楽譜を書いていません。テキストスコアも実験音楽の手法にのっとりたもので、ケージの《4分33秒》も音符を一音も書いていない作品です。ケージに敬意を示しながら、私のやりたいことにチャレンジできたのは大きな機会でした。」ケージの《セブン》は7人の演奏者による「不確定性」の音楽。最後に演奏された山根さんの《カワイイ☆d》もまた「不確定性」を描いたそうですが、どのように関連しているのでしょうか。

「ケージはサイコロの目で演奏するなど恣意性の排除にフィーチャーしましたが、私がフィーチャーしたのは『感覚』。楽譜の軸となる部分にはテキストで「カワイイ」と主観的に感じる音を出す」と書きました。そこに五線で書かれた私の主観による様々なカワイイ音の提案が続きます。ケージとの「二人展」だからこそ際立たせることができた試みです。」

会場はジョン・ケージを知る世代から、10代まで様々な年代が集い、刺激的な音楽体験に没入した高揚感で満ちました。



C×C 作曲家が 作曲家を訪ねる旅

——作曲家・山根明季子がジョン・ケージを訪ねて

聞き手・文：猪上杉子



写真：大野隆介

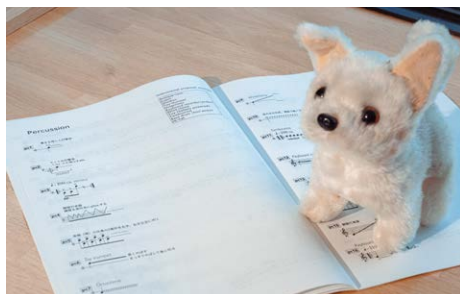
山根明季子

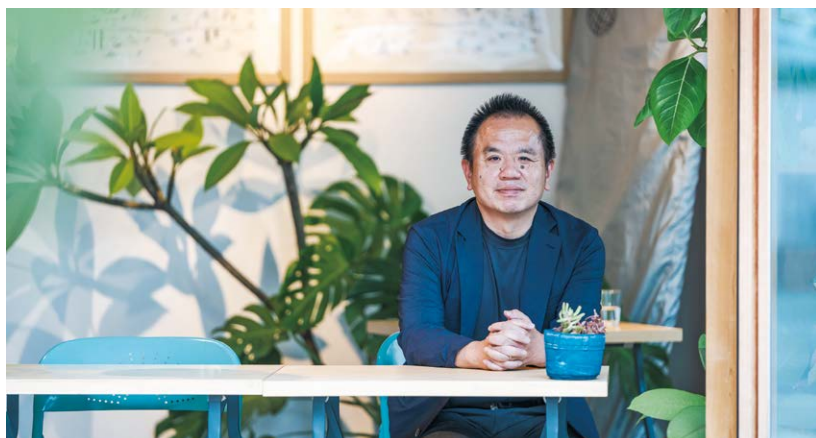
【やまね・あきこ】1982年大阪生まれ。京都市立芸術大学大学院修了。プレーメン芸術大学派遣留学。物質、空間、サブカルチャー、ゲーム、デジタル表現などから影響を受け、消費社会やポップ、抑圧などをテーマとして作曲活動を続ける。美術館などでのパフォーマンスやキュレーションなど活動は多岐にわたる。

ジョン・ケージ(1912-1992)は どんな作曲家？

1912年ロサンゼルス生まれ、作曲家としてばかりでなく、詩人、思想家、キノコ研究家としても活躍した。「実験音楽」を掲げ、「チャンス・オペレーション」による作曲、「不確定性の音楽」、「偶然性の音楽」などでこれまでの音楽の枠組みを解体してみた。《4分33秒》は特に知られる。また、ピアノの弦にゴム、ボルトなどを挟んで音色を打楽器的なものに変化させる「プリペアド・ピアノ」を考案したことでも知られる。

山根明季子「カワイイ☆d」の楽譜と、この曲で「打楽器」として使用された山根さんの私物のオモチャの犬
写真：大野隆介





写真：大野隆介



木津さんが空間デザインを手がけた『浜辺のアインシュタイン』舞台風景 写真：加藤 南

公演の裏舞台

空間デザイナー編

聞き手・文：編集部

※本インタビューのロングバージョンはWEBに掲載しています。

建築家・空間デザイナー

木津潤平

[きづ・じゅんぺい] 建築家。「場の力」を最大限に活用して戯曲の世界観を表現する独自の空間デザイン手法を確立。(株)木津潤平建築設計事務所代表。主な舞台作品に劇団地点『光のない。』、SPAC『マハーバーラタ』(アヴィニョン演劇祭／2014年)、『アンティゴネ』(同左／2017年)など。

「舞台裏」で公演を支えるスタッフたちの「技術」をお伝えする本コーナー。今回は、県民ホールで上演された『浜辺のアインシュタイン』(18ページ参照)で空間デザインを担った木津潤平さん。建築家として公共施設や住宅などを手がけながら、演劇やダンスなどの空間デザインにも幅広く携わる木津さんに、お話を聞きました。

——演出家の平原慎太郎さんとは、空間デザインをどのように立ち上げていましたか？

クリエイションのはじめは、物理や哲学の話をたくさんしました。宇宙や、ループする時間の永続性、マルチバースといったテーマから、もう少し身体に寄った生命、死、再生といったものまで。このような対話を空間デザインに落とし込んでいく時は、頭で考えることからすこし離れて、スケッチブックを開いて手を動かしてみた(写真)。そうしたら自分の手が、ひたすら水平線と階段を描きはじめたんです。これまでの思考が身体を通して出てきた瞬間でした。それを階段状で横長の模型にして「これは浜辺です」と平原さんにお見せしました。

様々な使い方ができるのが「器」だと考えていて。空間デザインにも機能的な要求をいただくことはある。でも「今回の器はこれです」と演出家に渡して、自由に使ってもらいたく方が豊かなコラボレーションになると思っています。平原さんとはそういった理想的な関係で一緒にできました。階段状の舞台の上で横に動くという制約は、ダンサーにとって負荷がかかるものですが、それを微塵も感じさせない作品に結実していました。

——建築と舞台の仕事について、似ているところや違いを教えてください。

プロセスは似ていますが、時間の流れがまったく違いますね。建築は自分が生きている間は壊される可能性が低いです。空間デザインは一瞬で消えてしまふ。それなのにどうしてこんなに夢中になれるのか。舞台芸術はかたちがあつて終わりがありません。それは命のようなものかもしれないと思うんです。実際にパフォーマーが居て命を燃やしている。だからこそ感動もするし、終わる時あんなに切ないんじゃないかと。

木津さんが描いた「波の様に重なるSTEP」(下)。実際の舞台の原型となる断面図も(上)

写真：大野隆介



自然素材の家づくり + 完全フル装備の家®



富士住建は
「ひのきの家」を建てることで
森を守る循環型社会を
目指します。



HPはこちら



富士住建



神奈川芸術プレス 読者アンケート

神奈川芸術プレス(vol.162)をお読みいただき、ありがとうございました。アンケートにお答えいただいた方のなかから、抽選で1組2名様を、2023年5月27日(土)18:30開演 キッドピボット『リヴァイザー／検察官』(神奈川県民ホール 大ホール)にご招待いたします。今後の誌面づくりに生かすため、ぜひご意見・ご感想をお寄せください。

アンケート項目

1. 神奈川芸術プレスはいかがでしたか。ご意見・ご感想を教えてください。
2. 今号で印象に残った記事を教えてください。
3. 次号以降、読んでみたい特集テーマがあれば教えてください。
4. 今気になっている「ひと」や「こと」、「場所」などがあれば教えてください。
5. 神奈川芸術プレスをどちらで手に取りましたか？

応募方法：「WEBアンケートフォーム」もしくは「はがき」に、アンケートの答えと、メールアドレスを明記のうえ、ご応募ください。

WEBアンケートフォーム：https://krs.bz/kanagawaaf/m?f=1125

はがき郵送先：〒231-0023 横浜市中区山下町3-1 (公財)神奈川芸術文化財団 神奈川芸術プレス読者アンケート係

回答期限／はがき必着：2023年4月30日(日)

当選発表：厳正なる抽選のうえ、当選者の発表はメール送信をもってかえさせていただきます。

- ・当選に関するお問い合わせには回答いたしかねます。
- ・当選通知メールは、kaf@kanagawa-af.orgのアドレスから送付予定です。
上記ドメインからのメールを受信できるよう、設定をご確認ください。
- ・メールアドレスの間違い等でメールが送信できない場合は、当選を無効にさせていただきます場合があります。
※お申し込み時にいただいた個人情報は、当選通知以外の目的には使用いたしません。

WEBアンケート
フォームはこちら



ご支援のお願い

神奈川芸術文化財団は、心豊かな芸術文化の創造に寄与するとともに、神奈川の地から世界に向けてその発信を図ることを使命として活動しております。活動の継続にはご支援が大きな支えになります。皆様のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

- 賛助会員：1年を通じて事業全般にご支援をいただきます。個人賛助会員：30,000円(1口／1年) 法人賛助会員：100,000円(1口／1年)
- 個別協賛：当財団が主催する特定の公演・事業にご支援をいただきます。個人：30,000円～ 法人：100,000円～
- オンライン小口寄付：1,000円からクレジットカードで気軽に寄付いただけます。

特典

- ご芳名を掲載します。○財団主催公演のなかから選定した公演にご招待いたします。○限定イベントにご招待いたします。
- 神奈川芸術プレス(年2回発行)をお送りします。○最新のチケット情報をメールでお送りします。

お問い合わせ・お申し込み

(公財)神奈川芸術文化財団 経営企画課

https://www.kanagawa-arts.or.jp/support

電話：045-633-3760 (9:00～17:00／土日祝日・年末年始を除く)

(公財)神奈川芸術文化財団 賛助会員・協賛・協力・寄付 ご芳名

五十音順・敬称略(2023年1月31日現在)

【賛助会員】

法人賛助会員：株式会社アクトエンジニアリング / アズビル株式会社 / 学校法人岩崎学園 / 株式会社ヴォートル / 株式会社エス・シー・アライアンス / 株式会社NHKアート / 鹿島建設株式会社横浜支店 / 株式会社勝烈庵 / 一般財団法人神奈川県教育福祉振興会 / 株式会社神奈川孔文社 / 株式会社神奈川保健事業社 / 神谷コーポレーション株式会社 / 川本工業株式会社 / 株式会社共栄社 / 株式会社KSP / 株式会社合同通信 / 株式会社シグマコミュニケーションズ / 株式会社ジェイコム湘南・神奈川 / 株式会社清光社 / 株式会社Central Medience / 月島機械株式会社 / 株式会社テレビ神奈川 / 東工株式会社 / 株式会社日建設計 / 日成工事株式会社 / 日生商工株式会社 / 日総ブレイン株式会社 / 日本発条株式会社 / 株式会社野毛印刷社 / パナソニックEWEエンジニアリング株式会社 / Piascore株式会社 / 平安堂薬局 / 株式会社ホテル、ニューグランド / 一般社団法人本牧関連産業振興協会 / 丸茂電機株式会社 / 三沢電機株式会社 / 森平舞台機構株式会社 / ヤマハサウンドシステム株式会社 / 株式会社有隣堂 / 株式会社豊商會 / 株式会社ユニコン / 株式会社横浜アーチスト / 横浜信用金庫 / 弁護士法人横浜パートナー法律事務所 / 横浜ビルシステム株式会社 / 株式会社ワイイーシーソリューションズ / 匿名 3社

永年個人賛助会員：川村恒明 / 小山明枝

個人賛助会員：味田健一 / 小川 浩 / 黒瀬博靖 / 鈴木真由美 / 高岡俊之 / 高野伊久男 / 中澤守正 / 橋本尚子 / 三澤孝至 / 三澤光代 / 匿名 5名

【協賛・協力・寄付】

能舞台協賛：ナイス株式会社

個別協賛：株式会社アートフロントギャラリー / アクセンチュア 芸術部 / Accenture Art Salon / 株式会社ジンスホールディングス / 日本化工機材株式会社 / リコー社会貢献クラブ・FreeWill / 匿名 1社

協力：株式会社崎陽軒 / 寺田倉庫、TERRADA ART ASSIST株式会社 / 株式会社富士住建

一般寄付：匿名 2名

神奈川芸術プレス vol.162 発行：公益財団法人神奈川芸術文化財団 TEL:045-663-3711

2023年(令和5年)3月20日 発行

企画・制作：公益財団法人神奈川芸術文化財団、株式会社ボイズ、一般社団法人ノマドプロダクション

編集ディレクション：及位友美(voids) 編集：米津いつか、中村元哉(voids) 企画協力：山崎健太

デザイン：岡部正裕(voids) + 三浦佑介(shubidua) イラストレーション：白尾可奈子 校正・校閲：聚珍社 印刷：深雪印刷

神奈川芸術プレス
WEB版はこちら



【禁無断転載・複写】無料配布

※本誌掲載情報は2023年3月6日現在のもの